

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 言語を手掛かりとしながら、文章の内容を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて、情報を的確に理解したり、より効果的な表現に向けて検討、工夫したりする力などを求める。近代以降の文章（論理的な文章や実用的な文章、文学的な文章）、古典（古文、漢文）を題材とし、言葉による記録、要約、説明、論述、話し合い等の言語活動を重視する。

問題の作成に当たっては、題材の意義や特質を生かした出題とするとともに、大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題を含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 本文は、高岡文章「観光は『見る』ことである／ない——『観光のまなざし』をめぐる」（高馬京子・松本健太郎編『〈みる／みられる〉のメディア論——理論・技術・表象・社会から考える視覚関係』所収、ナカニシヤ出版、2021年）からの抜粋である。出題箇所は、高岡文章が観光との関わりからアーリの「まなざし論（『観光のまなざし』）」について論じた文章の一部である。観光における「見る」ことについては、近年、身体性との連関から捉え直す研究が積み重ねられてきていることを紹介している。また、筆者はオーバーツーリズムなどの問題が顕在化する中で、観光を観光者と現地住民との「見る／見られる」という主体／客体からなる枠組みだけで捉えるのではなく、観光者と現地住民、あるいは観光者間における「相互のまなざし」によって捉え直している。身近な観光を題材に、文章表現の特質や論理構造を理解する力を問うとともに、受験者が「見る」ことに対する認識を捉え直す契機となるよう問題を設定した。

問1は漢字問題。問2～問5は本文読解の問題である。問6は本文全体の読解の問題として設定した。問2では、本文読解の鍵となる語句の理解を問うた。本文理解の導入として適切であった。問3・問4では、本文の内容を的確に理解しているかどうかを問うた。本文の論旨をたどるための問題として適切であった。問5は引用表現に注目させながらその内容の理解について問うた。表現の趣旨を問う問題として適切であった。問6は本文の中心となる話題について本文全体を踏まえた理解を問うた。正答率は高く8割弱であった。

第1問の得点率は約67%であった。難易度として概ね適切であり、共通テストとしてふさわしい問題であったと考える。

第2問 本文は、蜂飼耳「繭の遊戯」（2005年発表）による。本作は、定職に就かず、その時々で夢中になったことに打ち込みながらもそれを継続して生業とするに至らず、親戚からも疎まれる「おじさん」を、作品現在において五、六歳だった「わたし」が当時の視点から回想する作品である。「わたし」は「おじさん」に対して微妙な距離をとっているが、交流を通して、少しずつ考え方を変化させていく。本問は、「おじさん」に対するまなざしの揺らぎを通して浮かび上がる「わたし」の内面を読み取らせる出題とした。

問1は、「わたし」が本文冒頭付近の「おじさん」の様子をどのように捉えているかについての理解を問うた。文章理解力を測る問題として適切であった。問2は、「母」と似た価値観から「おじさん」を非難する「わたし」の心情を理解しているかを問うた。文章理解力を測る問題として適切であった。問3は、複数の場面を結びつけて、「母」と「祖母」の人物像の違いを理

解しているかを問うた。場面を越える文章理解力を測る適切な問題であった。問4は、本文の冒頭付近と終盤付近とで2回にわたって用いられている「がっかり」という表現に着目させ、その違いから、「わたし」の変化を捉えられているかを問うた。本文全体を通した変化を読み解く力を測る適切な問題であった。問5は、本文の表現の特色を理解しているかを問うた。文章表現についての理解力を測る適切な問題であった。問6は、「おじさん」に対する比喻表現を通して、「おじさん」と「わたし」自身のことを「わたし」がどう捉えているかを問うた。終盤部分の内容理解を測る適切な問題であった。問7は、抽象的で難度の高い表現について、冒頭と終盤の楽器を演奏するシーンに着目させることで、そこから「わたし」の変化をどのように読み取れるかを問うた。文章全体についての理解力を測る適切な問題であった。

第2問の得点率は約73%であった。難易度として概ね適切であり、共通テストとしてふさわしい問題であったと考える。

第3問 「わかりやすい言葉づかい」について、高校生が自分の意見を書くという学習場面を設定した問題である。実用的な文章の読み解きだけではなく、書く力を問う問題を作成した。本問では、国立国語研究所の外来語の言い換えに関する調査と、調査に基づいた言い換えの提案を資料として書いた高校生の文章を示した。また、書いた文章を丁寧に推敲していくという学習過程も重視し、国立国語研究所の調査とほぼ同時期の2002年と、その20年後である2022年を比較することができる外来語に関するNHKの意識調査を、自説を補強する資料として取り入れて改稿する設問にした。

問1・問2は、資料の情報からわかることを的確に読み取り、自分の文章に活かしていく力を問うた。問3(i)は、新たに加えた資料からわかることを的確に読み取り、どの情報が自分の文章で主張したいことの裏付けにならないかを判断する力を問うた。(ii)は、全ての資料の情報を関連付けながら文章全体を整える力を問う問題として設定した。

第3問の得点率は約66%であった。新教育課程に対応した共通テストにおける初めての設問として、概ね適切であったと考える。

第4問 【文章Ⅰ】の『在明の別』は、院政期の成立とされる物語である。出題箇所は、かつて左大臣と関係を持ち彼に執着を抱く中務宮の北の方が、生き霊となって左大臣の妻・大君に取り憑く場面である。【文章Ⅱ】の『源氏物語』は、平安時代中期に作成された長編物語である。出題箇所は、光源氏の妻である紫の上に、光源氏のかつての恋人である故六条御息所が死霊となって取り憑き、紫の上が危篤となってしまいう場面である。

【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】ともに臨場感をもって語られており、もののけによる憑依という古典文学ならではの設定が描かれていて、古文の特徴を理解し、その内容を的確に読み取る力を確認する上で適切な素材文であった。また、【文章Ⅰ】は【文章Ⅱ】を摂取して作られている。二つの文章を合わせ読むことで、先行作品の継承による創作という古典文学の特質を踏まえて読み比べさせることも可能となり、その点でも有意義な素材文であったと言える。

問1は、本文の読解に必要な基本的な単語の知識及び内容を理解する力を問うた。問2は、文脈理解に必要な敬語の知識を問うた。問3は、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の内容を、それぞれ比較しながら理解していく力を問うた。(i)は【文章Ⅱ】のもののけの発話を読解する力を問い、(ii)は【文章Ⅰ】の和歌の表現から、和歌を詠んだ主体及び和歌の内容を読み解く力を問い、(iii)は【文章Ⅰ】の内容を理解する力を問うた。

第4問の得点率は約57%であった。【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】とも読みやすい文章であり、全体的な難易度としても適切で、共通テストとしてふさわしい問題であったと考える。

第5問 『論語』は「言語文化」の多くの教科書で採録されており、高校生に最も馴染みのある

古典漢文の一つである。その衛霊公篇の一節を取り上げ、それに対する近世日本の漢学者である皆川淇園の解釈（『論語釋解』）及び、淇園の門弟である田中履堂の評論（『学資談』）を組み合わせ、複数素材問題として出題した。字数は合計199字（いずれも句読点などを除く）で、近年の出題文の平均字数に近似しており、共通テストとして無理のない範囲であると考えられる。

各設問では「言語文化」の学習内容を踏まえ、複数の文章を正確に読み取り、その上で古典漢文を介して練られた書き手の考えを深く理解できるかを問うように工夫した。問1は漢文の基礎的な語彙について、文脈に即して理解できるかを問うた。問2は【文章Ⅰ】の構成と内容が把握できているかを問うた。問3は比較の句法を理解した上で、文脈に応じた解釈ができるかを問うた。問4は読解の鍵となる部分について、文意に適った返り点と書き下し文を選択できるかを問うた。過去に類題が何度も出題されているものの、この小問の正答率は極めて低かった。新教育課程での漢文教育の変化との関係性を検証しつつ、次年度以降の作問に活かしたい。問5は漢文の中で頻出する同訓異字について、文脈に即してその意味の違いが理解できているかを問うた。問6は複数の文章を正確に読み取り、両者の主張の要旨とそれらの関係性を理解する力を問うた。

第5問の得点率は昨年度の漢文問題と同程度の約55%であり、適切な難易度を維持できている。設問の識別力は概ね高く、新教育課程の下で最初に行われた共通テストとしてふさわしい問題であったと考える。

3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

第1問 論理的な文章の内容を的確に読み取る力や思考力を確認する上で適切な素材文であったと評価された。また、選択肢を減らしたことについては、受験者にとっての時間的な負担の削減に貢献したとの評価を受けた。問6は本文の中心となる内容についての理解を問う良問であると評価されたが、一方で、問題作成方針が重視する言語活動を意識した形式になっていないとの指摘を受けた。出題の形式やねらいについては今後とも多面的・多角的な視点から検討を重ねていきたい。

第2問 「おじさん」との様々なやり取りなどから、幼いながらも自身の価値観の変容に至る「わたし」が描かれており、心情の変化の把握を中心とした文学的な文章を読み取る力を確認する上で適切な素材文であり、読者の想像を喚起する作品であるとの評価を得た。また、問7については、比喩的な表現に着目し、本文の冒頭から終盤にかけての「わたし」の心情の変化について正しく読み取る力を問う出題であり、問題作成方針に合致するものとして評価された。語句問題の出題を望む声も聞かれたが、語句問題を出题しうかどうかは素材文に用いられている語句や他の出題との兼ね合いもある。文学的な文章を読み取る力や受験者の総合的な言語能力を検査できるよう、引き続き適切な出題に努めていきたい。

第3問 言語活動を重視した学習場面が設定されており、問題作成方針に合致している。また、書くことの指導事項につながる出題の工夫が見られたとの評価を得た。素材に関しても、目的に応じて情報を的確に理解したり、より効果的な表現のために工夫したりする力を確認する上で適切であったとの評価を得た。だが、実用的な文章を題材として大問を作成するのは今回が初めての試みだったこともあり、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を幅広く問う問題とすることや、理解しやすいという特性を持つ実用文を素材としつつ設問の難易度を確保することについては、今後も工夫が必要であると考えられる。今回の設題に対する反響や意見等を踏まえ、受験者にとって多大な負担とならないよう文字量や難易度のバランスを鑑みながら、よりよい問題の作成に努めたい。

第4問 注や人物関係図を参考にして古文を的確に読み取る力、また、複数の作品を読み比べて理解する力を確認する上で適切な素材文であったとの評価を得た。加えて、加持祈祷やものけなど、我が国の文化に目を向けた点が「言語文化」の特徴を捉えており、新課程における共通テストの方向性が示されていたという評価も得られた。特に、問3は良問であり、作問の工夫や時間配分への配慮が随所に見られ、難易度も適切であるという評価であった。一方で、小問が個別の文章の読解にとどまっており、複数テキストを比較する問いであればより望ましかったという意見もあった。この点については作問上の難しさがあるものの、古典文学の特質を受験者に理解させる重要な観点であるため、今後も課題として検討していきたい。

第5問 新教育課程での漢文学習の位置付けを踏まえて、大きくは以下の3点の工夫を試みた。

第1に、共通テストの本試験では初めて、日本漢文を素材として出題した。この点に、「我が国に特有のものの見方・考え方と中国との関係を知るとともに日本人の考えが漢文を通して表現される機会が少なくなかったことに気付かせる素材の工夫などは、授業改善あるいは生徒の探究的な学びにおいて大いに示唆に富むものであった」という評価があり、関係各所で好感をもって受け入れられたと判断する。第2に、古典漢文と現代日本語とのつながりを考察させる新傾向の問題を用意した。この点には、「漢文と現代語のつながりを意識させるとともに、語の意味を丁寧に捉え、言語感覚を磨くことの重要性を示している」という前向きな反響があった。第3に、知識の有無のみによって正誤が決まる問題を減らし、文脈を丁寧に追うことで正答できる問題を増やした。教育現場での漢文学習の変化を考慮すると、今回の得点率は、この工夫が機能したと判断するのに十分な値であると考ええる。

4 ま と め

第1問 本問では、文章を的確に読解する能力を問う問題を設定した。素材文・出題内容・難易度は適切であり、選択肢を減らしたことについては受験者の時間的な負担軽減につながった。一方で、昨年度に比べて平均点の上昇が見られた。今後も設問の難易度に配慮しつつ受験者の学習の成果が的確に測れるような問題作成に努めていきたい。

第2問 基本的な読解力を判定する上で、内容・分量・難易度において適切な出題であったと考える。今後も、これらのバランスに十分留意しながら、問いたい能力を適切に判定できる素材文の選定及び作問に努めたい。

第3問 図表等も含む複数の資料を用いて文章を書くという設問にした。実用的な文章を素材とした初めての設問として適切なものであったと考える。今後もさまざまな工夫を取り入れながら適切な作問をしていけるよう心がけたい。

第4問 古文単語や敬語といった基礎的な知識を問う設問から、影響関係のある二つの文章を読み比べつつ本文の内容や和歌について考える設問まで、多様なレベルの問題を出題しており、古文の学習成果を確認するのに適切な問題であった。今後も、多様な素材を視野に入れ、古文の特質や魅力を伝えながら、適正に受験者の思考力を測れる作問を心がけたい。

第5問 本大問の得点率と得点分布は、平素の学習成果が的確に反映される問題の形式と内容であったことを示しており、共通テストとして適切であったと考える。引き続き良問の作成に努めたい。なお、言語活動の取り入れは、大問の言語情報量（字数）の増加を伴うため、導入を検討する際は慎重に進めていきたい。